

論文の内容の要旨

論文題目 社会的参照現象における養育者の能動的役割

氏名 小沢 哲史

1. 社会的参照の定義と発達の意義

生後、8、9カ月頃から、ヒトの乳児には、特に新奇性のある対象に遭遇した際、緊張を秘めた面持ちで他者（多くの場合養育者）に対して、頭部回転運動を伴う視線を向けることが観察されている。社会的参照は、こうした現象を説明し、その発達の意味を探るために概念化されたと言える。研究者のほとんどが同意している唯一の定義といったものはないと考えるべきかも知れないが（Desrochers et al., 1994）、本研究では、「意味の不確かな対象と遭遇した際に生じた不安定な情動状態を、他者が発する情報を活用し、その対象の意味を知る（情報探索）ことによって建て直し（情動調整）、さらにはその対象に対する自らの行動を決定・実行する（行動調整）という一連のプロセス」を採った。ここにおける情報とは、自らが遭遇した対象に対する他者の解釈としての情動的な情報を指すと考えられている。社会的参照の下位能力を列挙すれば、それは、(1)情動の弁別的理解、(2)情動が何に対して発せられているのか

という指示的性質の理解, (3)他者が有用な情報源として機能しうるかに関する他者の潜在的有用性の理解ということができよう(Baldwin & Moses, 1996)。

社会的参照の発達の意義とは、まず、ヒトが社会的存在として環境に適応しているという種としての本質に関わると考えられることである。ある特定個人の情動が、その人物の対峙している外的状況ないし事象のインデックスとして機能しているとすれば、心理的関係というものをヒトが対象に持ちうるということ、および自他の潜在的等価性を前提に膨大な社会的・文化的学習を行うヒトという種にとって、社会的参照は大きな可能性を秘めていると言えよう。

また、社会的参照は、“葛藤場面”，すなわち、多くの場合、ある対象の出現が個体の情動システムの安定を脅かした状況において生じやすいとされている。自己をある種の情動的な核を持った連続体とすれば、社会的参照は、いわばその断絶部分に位置し、そこにおいて他者を求めることから、自己の成り立ち、および自己における他者の位置付けに関わっていると考えられ(Emde, 1992)、自己および他者というものの意味を理解していく上で、きわめて興味深い現象であると言えよう。

2. 社会的参照の実証的研究史

実証的な社会的参照は、主に行動調整効果を検討する目的で、乳児に潜在的な危険を感知させるような電動玩具を刺激として呈示し、その時に他者が与えた情動的情報に沿って、刺激に対する対処行動が調整されるか否かという実証的枠組みによって検討されてきている。

本論文においては、乳児・他者・刺激状況のそれぞれについてのトピックという形を採って、研究史を概観した。まず、主体となる乳児自体に絡む議論としては、生後12カ月前後における社会的参照を完成体とみなすことが困難であることや、社会的参照が愛着のメカニズムと何らかの関連性を示す可能性を論じた。さらに、刺激に遭遇した乳児が養育者に対して視線を向けた、すなわち“ふりかえり行動”を示したからと言って、そのすべてが真に情報探索行動として良いのかどうかという疑問を報告した。

次に、参照される者あるいは情報源として機能する他者に関しては、特に養育者が表情・音声・身振りなどによって多重に情動的情報を与えた場合に行動調整効果が見られやすく、表情のみによっては見られにくいことや、その時に刺激に向かってというよりも、直接乳児本人に向かって情動的情報を与えた場合に行動調整効果が見られやすいことを報告した。

最後に刺激となる状況に関しては、そこに求められる“あいまいさ”の意味が未だ明確にされていないものの、30cm前後の電動玩具が比較的有効である事、および多くの研究において、刺激が十分な葛藤をすべての乳児に喚起できたとは言えず、かなり多くの乳児が、そもそも社会的参照を行う動機づけを有さなかった可能性があることを論じた。

3. 従来の実証的枠組みへの批判と3種の社会的参照

これまでに行われた研究から、特に養育者が日常的働きかけに近い多重な情動的情報を与えた場合、十分に適応的といえるふるまいを12カ月頃以降の乳児が刺激に対して示しているということが言えよう。しかしながら、その実証的枠組みは、必ずしも、それが乳児単独のコンピテンスによる社会的参照であるのかどうかを明確にするものではなかったようである。特に、養育者が多重に情報を与えさえすれば、刺激が社会的参照への動機づけを生じるような葛藤を喚起せずとも、あるいは乳児が情報探索行動を示さずとも、行動調整効果らしき刺激への行動の変容が示されてしまうことからすれば、現在の実証的枠組みは、乳児単独のコンピテンスによる真に自律的・能動的な社会的参照を検証するものとしては機能していなかった可能性が高い。

そこで、本論文では、乳児が自律的／能動的に行ういわば定義通りの社会的参照を(1)自律型の社会的参照とする一方で、養育者が乳児の能動性に考慮せずに一方的に情報付与を行い、乳児が模倣や気分変容、情動感染などの低次の身体的同調作用メカニズムによって反応し、結果的に刺激への行動の変容が生じた場合を(2)巻き込まれ型の社会的参照と呼び、分別・整理して捉えることとした。しかしながら、これら2種の社会的参照だけでは、十分な説明は与えられないだろう。社会的参照が他者なく

して生じず、またこの他者が乳児の日常生活（および殆どの実験場面）においては養育者であるということ、さらには、養育者が一般的に、乳児の不明瞭な表出行動に社会的に整合的な評価・意味付けを行いながら、乳児の発達の最近接領域に働きかけていく傾向を有することから(Miller, 1995, Vygotsky, 1978), 日常場面において最も頻繁に生じているのは、乳児の未分化な社会的参照行動を行おうとしていると養育者がみなし、学習場面の明確化や情動的情報の明確化によって補うことから生じている相補性の社会的参照であろうと考えられた。そこで本論文では、1歳台の日常生活において中核を占めると考えられるこのようなコミュニケーションを(3)相補型の社会的参照と呼び、今後の社会的参照研究は、養育者のあり方に注目しながら行うべきであることを提唱した。

4. 養育者の主観性の特質としての"自律促進傾向"が、養育者の"情報探索評価"に及ぼす影響

このように社会的参照獲得に養育者が関わっているとすれば、今後の研究は、養育者の個人差が乳児の社会的参照の個人差に関わっているという仮説を検証していくものとなる。但し、日常場面で生じているような自発的かつ多種多様な養育者のふるまいを十分客観的に多くの対象者においてデータとするのは困難である。そこで、本論文においては、養育者の主観性のレベルにおいて、「自律促進傾向」というものを仮定し、この自律促進傾向が、乳児の表出行動を情報探索行動として評価させ、そうした評価に基づき乳児に働きかけると仮定した。そして、さらにこの働きかけによって補われた相補型の社会的参照が蓄積し、最終的に乳児の自律型の社会的参照が獲得される、という因果モデルを想定した。

子どもが依存から自律へ進む以上、これを促進しようとする養育者側の主観性、すなわち自律促進傾向を想定するのは自然なことであるが、そこにはかなり広範な個人差が生じていると考えられる。本論文では、第1に、この個人差を質問紙によって測定することで、社会的参照に対する養育者の介入を実証研究に乗せることとした。この自律促進傾向には、現実の養育実践において乳児をどれだけしつけようとしている

のかという直接的に表出されるレベルと、乳児との関係性において生ずるが直接的な表出は困難な違和感や不快のレベルという2種類が想定されたため、それぞれについて3項目計6項目を、99名の養育者（子は、言語的なコミュニケーションが活発になる直前の19カ月児）に対して問うた。その結果を数量化にかけた所、ほぼ予想された形で2つの相関軸が得られた。そこで、第1相関軸を「自律期待（依存への否定的感情）」、第2相関軸を「自律的養育への構え」と命名した。

次に、養育者の自律促進傾向の個人差が、何らかの意味で社会的参照場面において乳児の自律性を促進するような養育者のあり方に関わっているという仮説が置ける。そこで、本研究においては、まず、刺激呈示法を改善する事によって乳児が等しく刺激に対して明確な葛藤を起こした（社会的参照への動機づけを持ちやすい）場面を実現した。そして、そこで乳児が示したふりかえり行動というものを刺激とし、養育者がこれを情報探索行動と評価するか否かを測度として採った。その結果、仮説通り、自律促進傾向が高い養育者ほど情報探索評価を行いやすかった。

5. 養育者の自律促進傾向が乳児の社会的参照に及ぼす影響

さらに、今回対象とした生後19カ月の時点で、すでに養育者のふるまいによって補われた相補型の社会的参照を多少なりとも乳児が蓄積しており、早期の自律型の社会的参照能力を持っている可能性があるだろう。そしてそこに、養育者の自律促進傾向が影響しているという仮説が置ける。すでに述べた通り、現況の実証的枠組みは、乳児の自律型の社会的参照を十分に検討する枠組みとはなっていないが、刺激呈示法や養育者の情報付与のあり方に配慮する事によって、改善する事は可能であると考え、実行した。その結果、養育者が表情によって否定的情報を与えた群において、養育者の自律促進傾向が乳児の刺激への情動調整効果に影響をもたらしていることが示された。